城西大学水田記念図書館報

Book Mark

Vol.89

2016
特集号

■ 城西大学創立50周年記念特集号 ■

水田記念図書館の取り組みについて

水田記念図書館 館長 橋本フミ惠

水田記念図書館では、2015年に城西大学創立50周年を記念しまして、記念展示、講演会、読書感想文コンテスト2015を開催しました。

記念展示は図書館１階のコーナーで10月、11月に行いました。図書館の変遷を年表にして示し、初期の図書館で使用されていた道具なども展示して、Web対応の図書館システムの導入や無線LANの整備など、近代的な図書館へ変貌する姿がわかるようにしました。

記念講演会は、経済学部庄司啓一教授により「TPPとアメリカの世界戦略： オバマ政権の推進するTPPの真の狙いは何か」の演題で行われました。タイムリーなテーマのために参加希望者が多く、定員オーバーによりお断りするくらいでした。

読書感想文コンテストは、中学高校生の部は145名、大学生の部では100名の応募がありました。学外審査員として坂戸市教育長に審査をお願いしました。読書感想文コンテストは広報を兼ねて行っており、表彰式には中学校の先生方やご父母が、受賞者を引率してご参加くださいました。受賞者と引率者は当方の予想以上に受賞を喜ばれて、また館内ツアーやライトフェスティバルなどもお楽しみくださいました。中学生は図書館のスケールの大きさ、本の多さに目を白黒させていました。

図書館は開設以来、大学創立50周年の今日まで、時代時代に応じて様々な取り組みを行って参りました。近年では、書評合戦の「ビブリオバトル」を行ったり、「学生アドバイザー」制度を設けたりしております。

現在、図書館では主に、国際性、地域貢献、女性の活躍推進の3つの課題を掲げています。これらを図書館本来の機能としての読書推進、図書館の利用推進と合わせる形で、取り組みを行っています。

読書感想文コンテストの大学生のテーマ課題は、①真の国際性とは　②地域における協力　③女性の活躍推進、としました。学生たちにこれらのテーマについて、図書館などを利用して本を探して、読み、よく考えてもらうためです。2015年度のコンテストでは、植田瑞美 （薬科学科2年）さんが「緒方貞子－戦争が終わらないこの世界で」（小山靖史著）を読み、「教養によって導かれる国際性」の題で応募してグランプリを獲得しました。

地域との連携では、2014年度より図書館をよく利用される外部の方7名に「地域アドバイザー」を委嘱しました。ミニ講演会などの講師やおすすめ本のポップ作成を通じて、読書の面白さを学生に伝え、学生との交流を深めていただいています。2015年に開催したミニ講演会の講師は、38年間米国で教師として活躍した女性の地域アドバイザーでした。

本は心の栄養になり、豊かな人間性を育むことができます。本学の建学の精神である「学問による人間形成」を具現すべく、これからもいろいろな取り組みを行い、図書館の充実発展に努めたいと考えております。

図書館のあゆみ

1965 昭和40年
- ◆4月 経済学部・理学部の2学部で開学
- ◆和書12，340冊 洋10，500冊 計22，840冊 閲覧席40席（昭和40年文部省学校基準調査より）
- ◆図書の利用は、出納式で閲覧のみの利用

1966 昭和41年
- ◆6月 閲覧室（理学部棟406号室）の使用を開始
- ◆開室時間は、月曜日から金曜日は9時半から16時、土曜日は9時半から13時
- ◆日本図書館協会入会

1967 昭和42年
- ◆9月 経済学部図書室（701号室）の閲覧開始

1970 昭和45年
- ◆図書室の一部を開架式に変更

1971 昭和46年
- ◆9月16日から学生への館外貸出（1冊）を開始
- ◆その後、11月から2冊まで貸出できるように変更
- ◆初年度貸出冊数は1，108冊
- ◆3月 図書館規程を制定
- ◆12月 経済学部図書室を4号館2階に移転、翌年1月開室

1973 昭和48年
- ◆薬学部開設により、薬学部棟（6号館）完成。自然科学分野の図書室を6号館に開室
- ◆日本薬学図書館協議会（JPLA）に加盟

1977 昭和52年
- ◆6号館、4号館図書室の資料を10号館図書室に移動
- ◆貸出方式をブラウン式（貸出券方式）に変更

1978 昭和53年
- ◆念願の図書館棟が竣工
- ◆建物の2、3、4階部分を図書館として使用
- ◆蔵書数15万冊、閲覧席541席、教職員用閲覧席51（個室15含む）、視聴覚室90席、10号館図書室から資料を移動
- ◆数学関連の図書は1号館に残し、現在も数学科図書室として利用

1980 昭和55年
- ◆平日の閉館時間を17時45分に延長

1983 昭和58年
- ◆OCR（機械可読文字）ラベルを図書に貼付開始（3年計画）

1988 昭和63年
- ◆埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）が城西大学を含めた31機関で発足
- ◆5月 SALA設立総会を本学図書館9階で開催

1990 平成2年
- ◆SALA共通閲覧証の利用を開始

1993 平成5年
- ◆清光会館竣工により図書館棟1階事務局が清光会館へ移動、図書館棟改装により1～4階を使用
- ◆3階グループ学習室、個人閲覧室を設置

1995 平成7年
- ◆IBM図書館統合システム「DOBIS」導入
- 「JOLIS」と名付ける

1996 平成8年
- ◆学術情報センター（現NII）のILLシステムに参加

1997 平成9年
- ◆「城西大学水田記念図書館ホームページ」を開設

1999 平成11年
- ◆図書館システムをIBM「LibVision Ver.2」へ移行

2000 平成12年
- ◆平日の閉館時間を19時に変更

2004 平成16年
- ◆図書館システムをWeb対応のNEC「E-Cats」に移行

2007 平成19年
- ◆9月 図書館サービス向上のためのアンケート調査実施
- ◆鶴ヶ島市、毛呂山町、坂戸市、日高市の図書館と相互協力提携

2008 平成20年
- ◆越生町、飯能市の図書館と相互協力提携
- ◆4月 平日の開館時間を21時まで延長し、土曜日は19時まで、日曜日も17時まで開館
- ◆4月 ライブラリーカード会員制度を開始
- ◆7月 3階シラバスルーム設置
- ◆11月 5階、9階に閲覧室、6階にグループ学習室を設置し、閲覧席の数が790席になった

2009 平成21年
- ◆1月 埼玉県地域共同リポジトリ「SUCRA」に参加
- ◆図書館システム「E-Cats」をバージョンアップ
- ◆7月 館内での水分補給（ペットボトルなど蓋の閉まるもの）を許可
- ◆8月 入館ゲートを入替
- ◆11月 第2回図書館サービス向上のためのアンケート調査実施

2010 平成22年
- ◆2月 城西大学機関リポジトリ「JURA」の公開を開始
- ◆4月号より図書館報の名称を『BookMark』に変更

2011 平成23年
- ◆2月 ツイッターによる広報を開始
- ◆3月 東日本大震災による被害で図書館を一時休館し、学生の協力を得て復旧作業を行った
- ◆4月14日より1階～3階と積層書庫の利用を再開
- ◆6月27日より4～6階の利用を再開
- ◆8月 被害が大きかった積層書庫には落下防止装置を設置
- ◆漢方古書資料デジタルアーカイブを公開
- ◆11月 第3回図書館サービス向上のためのアンケート調査実施

2012 平成24年
- ◆1月25日より9階の利用を再開
- ◆8月 LANを整備し、Wi-Fiが利用できるようになった
- ◆10月 「学生が学生に相談できる」学生アドバイザー制度が発足
- ◆11月 図書館耐震補強工事を開始

2013 平成25年
- ◆4月 耐震補強工事が終わり、4階の閲覧席を増設。6階のグループ学習室を3部屋から4部屋に改修
- ◆9月 図書館システム「E-Cats」をクラウド型に移行
- ◆11月 第4回図書館サービス向上のためのアンケート調査実施

2014 平成26年
- ◆地域アドバイザー制度が発足
- ◆経営学部3年生（当時）が地区予選を突破して「全国大学ビブリオバトル2014～京都決戦～」に出場

2015 平成27年
- ◆7月～10月 トイレ改修工事
- ◆11月 第5回図書館サービス向上のためのアンケート調査実施

◆ 図書館の変遷 ◆

1965年4月、城西大学は経済学部(経済学科)，理学部(数学科，化学科)の2学部構成で開学した。1966年6月25日の告示によると、「図書閲覧室（406号室）の使用を開始」使用時間は「午前10時から午后５時まで」とある。その後、1967年9月に経済学部図書室として701号室を使用し経済学部資料の閲覧を開始している。開室当初は閉架式で閲覧のみの利用であった。また、この年に、日本図書館協会に入会し、大学図書館部会に所属した。

1970年、閲覧方式が一部開架式となった。1971年3月に図書館規定が制定され、4月施行された。1971年9月16日より学生へ1人1冊１週間の館外貸出を開始、11月より2冊に変更された。またこの冬、経済学部図書室を4号館の2階へ移転、翌年1月より開室した。

1973年、薬学部の開設に伴い6号館薬学部棟が完成した。6号館1階に開設された図書室には薬学分野の資料と1号館4階の図書室から数学分野以外の自然科学資料を移動し、自然科学分野の図書室として公開した。同年、日本薬学図書館協議会（JPLA)に加盟し、相互協力体制を整えた。

1977年、4号館および6号館図書室の資料を10号館に移動、数学分野以外のすべての図書が統合された。

1978年夏、念願の11号館図書館棟が竣工、地下1階、地上9階建の建物のうち、2～4階部分と併設された5層建の積層書庫を使用しオープンした。閲覧席541席、教職員用閲覧席51（個室15含む）、90席の視聴覚室を擁し、当時の蔵書数は15万冊であった。

1981年、図書館機構改正を行い、各学部別図書予算を全学図書予算に一本化し、図書発注機能を持った。図書館名称を「水田記念図書館」に統一した。

1988年5月、埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）の設立総会を本学図書館9階で開催し、SALAに加盟した。

1993年には事務棟として清光会館が竣工し、図書館は、情報化時代に即応できる機能を揃えるべく改装され1～4階まで使用することになった。その際、3階グループ学習室、個人閲覧室、AV室、検索用端末などを整備した。

2008年には、業務委託を開始、開館時間を9時まで延長、休日開館も実施、ライブラリーカード会員の制定や、地域公開も開始した。建物では、3階のシラバスルーム設置、5階9階の閲覧室、6階のグループ学習室を設置し、閲覧席の数は790席とし、利用者サービスの拡大を図った。

2011年の東日本大震災を受けて、2013年には耐震補強工事が行われ、その際に4～5階の閲覧席を拡張、6階のグループ学習室は3部屋から4部屋になった。2014年にはグループ学習室に電子黒板を設置、2015年にはトイレの改修工事も行い、居心地の良い「場」としての図書館となっている。

1980～1990年代の図書館と大学周辺

大学空撮写真

竣工当時のエントランス

3階 雑誌架

2階 閲覧席

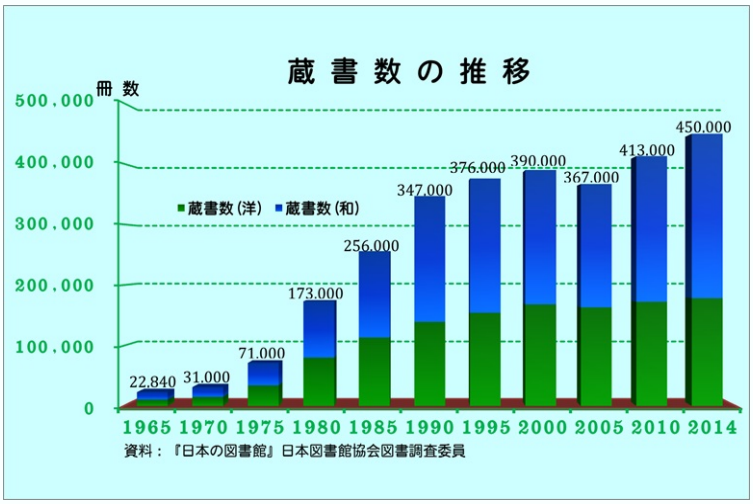
歴代館長

	館 長 名	専門分野
初代 1965年～1970年	新藤富五郎 先生	副学長
第2代 1971年～1973年	穂刈四三二 先生	数学
第3代 1974年～1976年	前田充明 先生	学長
第4代 1977年～1980年	永田義雄 先生	数学
第5代 1981年～1984年	山田俊一 先生	薬学
第6代 1985年～2002年	石川澄雄 先生	化学
第7代 2003年～2008年	木村浩 先生	教育学
第8代 2009年～2011年	黄色瑞華 先生	国文学
第9代 2012年～2013年	大島卓 先生	経営学
第10代 2014年～	橋本フミ恵 先生	薬学

◆ 蔵書数の推移 ◆

大学創立時の蔵書数は、22,840冊（和洋ほぼ半数）ほどであった。登録第1号の図書は和書が『学術の日本』（中央公論新社. 1942）、洋書が『The dynamics of Soviet society』（New American Library. 1954）である。

独立した図書館棟ができた1978年には約15万冊となった。それ以降増加を続け、2015年12月13日時点において、461,071冊（和書282,504冊、洋書178,567冊）と、開室当時の20倍以上の蔵書数となった。雑誌の受入数も増えており2015年3月末現在では、雑誌年間受入冊数1,355種、電子ジャーナル契約タイトル数8,468種、電子ブック購読数8,039種に達している。



また、利用者にとって、より使いやすく探しやすい図書館を目指して、各種コーナーの充実も図ってきた。2008年に設置したシラバスルームには、現在7,000冊余りのシラバス（講義要覧）掲載の教科書や参考書が、教員名50音順に配架されており、予習・復習、レポート作成等に活用されている。その他、教員おすすめ図書コーナー、学士力支援図書コーナー、就職支援図書コーナー、留学生支援図書コーナー、闘病記文庫、ガイドブックコーナー、姉妹校関連図書コーナー等を設置している。

2F

留学生支援図書コーナー

闘病記文庫

3F

シラバスルーム

1F

新書コーナー

展示コーナー

教員おすすめ
図書コーナー

就職支援図書コーナー

学士力支援図書コーナー

◆ 媒体の変遷 ◆

図書館で所蔵する資料は、紙媒体の資料の他、マイクロ資料や視聴覚資料、電子資料など、各種の媒体が存在する。マイクロ資料は5,600点ほど所蔵しているが、閲覧にはマイクロフィルム・リーダーが必要で、現在は簡単にPCで閲覧できるScanPro2000を設置し利用に供している。長期保存に耐えうるといわれたマイクロ資料であるが、温度・湿度など適切な保存環境を維持しないと変色したり酢酸臭が出てしまう。所蔵するマイクロ資料をデジタル化することも可能だが複製権などの問題が生じる。

その他、カセット・CD・LD・フロッピーディスク・CD-ROM・ビデオカセット・DVDなど様々な媒体の資料に対応するため、各種の機器を設置してきた。しかし媒体の変化は、機器の製造中止によって、収集した資料が利用できなくなる事態も招いている。1993年発売のMS-DOS用「広辞苑」CD-ROM版などもその一例である。

2000年代に入ると、インターネットの普及は、従来紙で出版されていた本や雑誌にも変化を促した。現在では、書架の狭隘化の問題もあり、購読洋雑誌の多くは電子ジャーナルに移行し、継続購入の洋図書なども電子ブックへ移行している。一例として、本学が1907年発行の第1巻から所蔵している膨大な資料、化学抄録誌『Chemical Abstract(*1)』は、2004年に導入したSciFinderによって、1907年から現在までの内容をオンラインで一括検索できるようになり、利便性が拡大したことなどがあげられる。

なお、近年雑誌論文のオープンアクセス化が進み、各大学では自機関で発行する紀要や商業誌に発表した論文をリポジトリで保存・公開するようになった。本学でも2009年1月に埼玉県地域共同リポジトリSUCRAに参加し、翌年2月に城西大学機関リポジトリJURA(*2)を立ち上げ公開を始めた。2011年には、漢方古書資料デジタルアーカイブを公開し、解体新書など貴重な古書資料をホームページから自由に見られるようにしている。

*1) Chemical Abstract

Chemical Abstract は化学分野の文献抄録誌。本学には貴重な初号から全て揃っている。創立当時の理学部長であった 千谷利三先生より寄贈された。

*千谷利三(1901－1973) 重水素の工業的生産の基礎を築いた。著書に「重水素と重水」「無機物理化学」「無機化学」などがある。

当時の寄贈申込書

*2) JURA

城西大学の教育研究活動等の成果物をネットワークを通じて公開・発信する「電子的な保存庫」。

「JURA」の名称は、Josai University Repository of Academia の頭文字をとり、「ジュラ紀」に栄えた恐竜、森、原生林を意味するラテン語 jura（ユリア）から名付けられた。収録対象は多岐にわたり、研究論文や博士論文、紀要のほか、広報のポスターなども含まれる。2015年12月現在で登録数は4,695点にも上る。大きな潮流となり、ますます注目を集めるオープンアクセスを語る上で、非常に重要なものとなりつつある。

CD・LD・VHS・カセットテープ
フロッピーディスク

マイクロフィルム・リーダー

漢方古書資料 デジタルアーカイブより
【解体新書 序図】

◆ システムの変化と図書館サービスの向上◆

図書室が開室した当時は閉架式を採用。図書館員に依頼して書庫から本を出納し、閲覧するのみだった(図書2冊以内、新刊雑誌は１冊)。利用の際は「図書閲覧請求票」に記入の上、学生証と引き換えに希望図書を受け取る仕組みで、閲覧時間は、午前10時から午後５時まで、土曜日は午後1時までであった。

1970年になり、ようやく一部開架式となって、書架から自由に本を選べるようになったが、閲覧時にはまだ手続きが必要だった。学生への館外貸出が開始されたのは、1971年9月16日からであった。学生の強い要望により、**稟議を経ての実現であった**(*3)が、貸出冊数は1冊のみ。更なる要望を受けて11月より貸出冊数が2冊となった。期間は1週間、館外貸出票に記入するシンプルな方式だった。1971年の貸出冊数は1,108冊。

1977年になり貸出方式を「ブラウン式」(19世紀末にアメリカのブラウン(N.E.Browne(1860-？)が考案し、その後イギリスのブラウン(J.D.Brown, 1862-1914)が改良したカード式貸出法)という貸出券を用いたものに変更した。

1980年図書購入時にカード目録添付システムを導入し、登録番号を一本化した。また、平日の開館時間を9時30分から17時45分に延長した。1983年より3年計画で全ての図書にOCR（機械可読文字）の登録番号ラベルを貼付し蔵書点検を行った。これによりパソコンでの貸出ができるようになった。

1988年CAS-ONLINE、日経NEWS TELECOM等の情報検索機の利用を開始した。図書館と情報科学研究センターによる図書館システム「JULIAS(城西大学図書館情報検索システム)」を開発。国会図書館のJPマークなどを取り込み、目録情報、所蔵情報、貸出情報を連携したシステムとなった。

1989年には図書館3階カウンターにCD-ROM 検索機を設置して、辞書・新聞記事の検索ができるようになった。まだインターネットが普及していない時代には、デジタル化されたデータは、CD-ROMのようなメディアに保存され、それを検索するのが主流だった。

1990年SALAの共通閲覧証が発行され他大学の利用が便利になった。

1995年にはIBM図書館統合システム「DOBIS」を導入、城西大学図書館システム「JOLIS」と名付けた。洋書の目録情報を遡及し、和洋図書の全蔵書データを機械可読目録とした。雑誌以外の全蔵書の検索が可能になり、資料を探すスピードは格段に速くなったといえる。

*3)当時の稟議書

Topic！

開室当時(1965年)は年間利用者数が384人。1966年には月～金(9:30-16:00), 土曜(9:30-13:00)と開館日数・時間がのびた。そのかいあって年間利用者数は4,512人まで激増。その後も徐々に開館時間を延長し、2000年に平日の開館時間が19:00までとなり、2008年には平日開館時間が21:00まで拡大。開館日数も年間平均250日だったが、日曜開館も始めたことにより、339日となる。その結果、年間入館者数は241,004人まで増えた。2011年の東日本大震災の際は臨時休館・短縮開館もあり落ち込んだが、その後回復。2014年には年間入館者数が305,449人となり30万人の大台に乗った。

1996年に相互貸借の方法を、学術情報センター（現NII・国立情報学研究所）のILLシステムを採用、1997年ユーザー会に加盟。他館が保有する文献を短時間で手配できるようになった。1997年「城西大学水田記念図書館ホームページ」を開設した。HPを利用した情報発信はここから始まる。1998年にはHPをリニューアル。「資料の探し方」と「逐次刊行物発注一覧」が追加された。この「逐次刊行物発注一覧」は、雑誌検索ができないJOLISを補うために、冊子体で作成していた「逐次刊行物目録」をリストとして公開し、電子ジャーナルへのリンクも張った。また、この頃、エルゼビア社のSD-21（ScienceDirect）が登場し、電子ジャーナルへの全文アクセスが可能な時代になった。

1999年、2000年問題を考慮してIBM「LibVision Ver.2」へ図書館システムを移行し、雑誌の所蔵データも含めた図書館目録OPACをインターネット上に公開し、全ての書誌・所蔵情報がOPACから検索可能となった。LibVision Ver.2の特徴は、KWIC（keyword in context：文脈つき索引)システムで、検索結果だけを表示するのではなく、利用者はカード目録をめくるように自分で確認することができた。

2001年には、電子ジャーナル227誌が利用可能となり、HPにリンクをした。また、HP上から文献複写、相互貸借申し込み、購入希望図書申し込みを可能にした。館内のOPAC端末は24台にまで増えた。JPLAの電子ジャーナルコンソーシアムが発足。ScienceDirect 、SpringerLinkなどをコンソーシアム契約した。

2004年 、Web対応の図書館システム「E-Cats」(NEC)を導入した。多言語対応、全文検索、城西国際大学のOPACとの横断検索、Webからの資料の予約、文献複写・相互貸借（ILL）申し込み等、学外からでもインターネットを通じて様々なことができ、図書館システムの利便性は向上した。また冊子体、電子体といった媒体の異なる資料も一括検索可能となり、OPACより電子ジャーナルなどの提供が可能となった。

2012年、図書館棟に無線LANを整備し、Wi-Fiが利用できるようになった。これにより、図書館内のどこででもWeb接続が可能となったが、機種により接続の不具合も出ている。

同年10月、学生への学修支援の一環として、教員の推薦を受けた学生による「学生アドバイザー制度」が発足。学生が学生に相談できる制度であり、メンバーは図書館内に常駐している。主な支援内容は、論文・レポートの書き方のアドバイス、文献の探し方、パソコン利用のサポートなどである。気軽に相談できる窓口として活躍しており、発足当初5名だったアドバイザーも、2015年現在では9名まで増えた。その他、ライブラリーラウンジの企画運営や、ビブリオバトルの司会など、幅広く活動を行っている。

2013年に「E-Cats」をクラウド型に移行し、データの保全、安定稼働を図った。その後もより利便性を高めるために随時改善を行っている。

2014年には、地域アドバイザー制度を発足させ、経験豊富な人生の先輩による、本の魅力、読書の大切さを学生に伝えるための活動を開始した。それぞれの経験や知識を生かしたミニ講演会（ライブラリーラウンジ）も実施し、学生との交流が広がっている。同年、地域と連携した読書推進活動の一環として、中学生、高校生、大学生を対象とした「城西大学読書感想文コンテスト」を初めて開催。2回目に当たる2015年は、大学創立50周年記念として開催し、部門1（中学生・高校生の部）は145名、部門2（大学生・短大生の部）は100名もの応募があり、グランプリ、準グランプリ、優秀賞を合わせ計10名が表彰された。

さらに施設面では、6階グループ学習室B室に自由に使える電子黒板を設置し、討議したい内容を画像としてホワイトボードに映し出し、その画像に複数で同時に書き込んだ内容をそのままの形で保存することができるようにした。

このように見ていくと、図書館システムや導入してきた機器の変化に伴い、利用者サービスも着実に進化してきたといえる。

◆ 図書館イベント ◆

現在図書館では、学生の学修支援の一環として、様々なイベントを企画・運営している。主なものについて記す。

■知的書評合戦ビブリオバトル

〈ビブリオバトル〉とは制限時間内に、自らのおすすめ本を紹介しあう書評ゲーム。城西大学では2011年6月開催の「紀伊國屋大学生大会」に学生1名が参加したのを皮切りに、同年10月に4名による学内予選会を開催し、勝ち抜いた1名が東京都主催の「首都決戦」に参戦した。以降発表者、観覧者共に増え、2013年には教員との連携により発表者は23名となった。「全国大学ビブリオバトル」となった2014年には、経営学部3年(当時)の学生が地区大会も突破し、京都決戦まで駒をすすめた。2013年からは高麗祭にて図書館学生アドバイザー主催の学内ビブリオバトルを開催。地域の方にも投票に参加いただき、学生の活動を観ていただく良い機会となっている。

■学生選書

2011年より、図書館が購入する本を学生が選ぶ＜学生選書＞をスタート。書店から図書館事務室に届けられた新刊500冊前後の図書より、学生が授業や学習に必要なものを実際に手に取り選書する。当初は申込制で事務室内のみに留まっていたが、講演会との連動や、図書館エントランスなど人目に触れやすい場所でも開催することで、より多くの学生に学生選書が認知され参加者が飛躍的に増えた。

■就活DVD上映会

2012年より、就職活動支援の一環としてスタート。就活の進め方から企業研究、面接、エントリーシートの書き方などが視覚的に学べる内容となっている。上映内容に合わせて、図書館所蔵資料やデータベースなどの情報収集ツールを紹介。さらに、2014年からは就職課と連携し、上映前に就職課職員から上映テーマに沿ったアドバイスをいただいている。就職活動の入門編から具体的な面接直前対策など幅広い内容で、学年問わず参考になる。また、入退室自由、予約なしで自分の希望に合わせて参加できることもあり、徐々に参加人数が増えてきている。

■各種講演会

2013年に、岩波書店の現役編集者を招き、一冊の本が生まれるまでの経緯を話していただいた（講演は好評を得、１か月後に再度開催）。2014年には柏書房取締役の方から出版社の営業についての話をしていただいた。これらは当初、読書推進と図書館利用の促進を図っての講演会であったが、学生のアンケート結果から仕事への関心を深めるきっかけとなったことがわかった。また、2014年から開催している著作権についての講演会は、学生だけでなく教員、ゼミ単位での申し込みが多くあり、2015年は薬学研究科の授業としての参加もあった。講演会後の質疑応答では多くの質問があり、研究職を目指す学生や論文執筆の際の教育支援につながった。それぞれの図書館による講演会開催が、キャリア支援を広げる機会となったことがわかる。

＜開催内容＞

2013年11月「岩波書店現役編集者が語る編集の仕事 ～本が生まれるまで～」
2013年12月　同上
2014年5月　「本が読みたくなるカラクリ ～出版社の営業ってナニ？～」
2014年10月「知っておこう著作権」
2015年6月　「知っておこう著作権2015」

■ライブラリーラウンジ

2014年に、学部・学年を超えて学生同士や教員と交流できる場として、幅広い分野のテーマで企画。学生アドバイザーによる就活体験を生かした企画や、地域アドバイザーによるミニ講演会、教員による知的好奇心を刺激される講演など多岐にわたる。リラックスした雰囲気の中、双方で話題を発展させていく座談会形式で開かれ、活発に意見交換が行われている。

＜開催内容＞

第1回「人生の先輩と本について語ろう」
第2回「ゲームで数学を解き明かしてみよう」
第3回「日本とアメリカ合衆国との生活から見えたもの」
第4回「元企業面接官が教える知って得する会社の取組内容」
第5回「数学者が見るアメリカの学生」
第6回「あなたのコミュニケーション能力って就活で活かせますか」
第7回「人を惹きつけるコミュニケーションの心理術」

◆図書館と地域連携◆

本学は「地域と共にある大学」を目指して図書館を地域に開放しており、15歳以上であれば誰でも無料で資料が閲覧できる。また地域の公共図書館とネットワークを結んでサービスを拡充するため、2007年に鶴ヶ島市、毛呂山町、坂戸市、日高市、2008年に越生町、飯能市の各公共図書館と相互協力提携を結び現在6機関と提携している。これにより、相互の文献複写や貸借、図書館の利用が拡大された。

提携図書館より、「直接大学図書館の本を借りたい」という地域住民の声に応えてほしいとの要望を受け、2008年4月にライブラリーカード会員制度を発足。地域の方も有料会員として登録することで、直接本学の図書を借りることができるようになった。

2009年7月、連携強化のために開催した第1回「地域相互協力図書館 館長及び主務者の集い」での討議の結果、同年11月には第1回「地域相互協力図書館合同主催公開講座」を開催した。大学が会場と講師を提供し、各市町図書館が合同で広報活動を行った。以降、鶴ヶ島市、坂戸市でも開催し、2015年に第７回公開講座を開催、毎回多くの方が参加している。

2010年3月には地域相互協力図書館合同の実務研修会を初めて実施した。以降、実務研修会は毎年テーマを変えて実施し、大学図書館と公共図書館という異なる館種における貴重な情報交換の場となっている。

同年より、毎年「鶴ヶ島市立図書館まつり」に参加し、本学の貴重書の展示や大学の教育・研究の成果物を紹介している。2012年、2013年には「坂戸市立図書館まつり」において貴重書を展示した。これらの公共図書館での展示は市民の方に大学を知っていただく貴重な機会となっている。

2009年からは埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）の加盟館として、埼玉県図書館協会主催の「図書館と県民のつどい埼玉」に毎年参加し、本学の貴重書を展示している。

<地域相互協力図書館合同主催公開講座 開催内容>

2009年11月　「中島歌子の生涯 /『おくのほそ道』の旅の成就

2010年11月　「室生犀星: 切なき思ひぞ知る / 小林一茶:『寛政三年紀行』わらびの駅」

2012年3月　「原発と人間」

2012年11月　「くすりにやさしく ～知っておきたいくすりのかたちと正しい使い方～」

2014年3月　「暮らしに役立つ身近な経済・経営 ～高度成長を続ける中国とどう付き合うのか～」

2014年11月　「地域産業の現在 ～JAPANブランドによる今治タオルの復活～」

2015年11月　「TPPとアメリカの世界戦略　～オバマ政権の推進するTPPの真の狙いは何か～」

◆ 編集後記 ◆

城西大学創立50周年記念展示特集号編集にあたって

水田記念図書館 事務長 若生政江

城西大学創立50周年を記念して「水田記念図書館～今昔物語～」と題して記念展示を行った。展示をするにあたって、創立当初の文書資料に目をとおしてみた。そこには学生への図書の閲覧から貸出に至るまでの経緯が、特に学生の要望から貸出を認め、貸出冊数を1冊から2冊に増やしていく様子が綴られている。学生の要望に如何に応えようか、草創期の先生方や図書館員の労苦が色あせた稟議書に見ることができる。

当時は、パソコンもワープロもコピー機さえない時代である。設置申請図書を1冊ずつ目録カードに手書きで記述し、登録番号順、分類順、書名順、著者名順など手書きで複製し、検索用にファイリングした。その後、カード目録サイズの輪転機が導入され手書きの複製が不要になる。複製した目録カード上へ著者名や書名を英文タイプで読みを付し、ファイリングするのは変わらない。1冊の本が書名から、双書名から、著者名、共著者名から、分類・主題から探せるようにファイリングして始めて閲覧・貸出に供せるのである。世界中の誰かが目録を作成すれば、それを即時に自館用に転用することが可能な現在とは違い、図書館は所蔵する資料の検索手段として目録作成に時間を取られる時代であった。

図書館の機械化に於いては、CJKの問題、中国語・日本語・韓国語が表現できない時代が長く続いたが、ワープロの登場により漢字が表現できるようになった。その後、パソコンの出現、インターネットの普及と相まって、多言語対応となり情報検索のツールは格段の進歩を遂げた。図書館は、これらの情報機器の進展に即して、それらを取り込み、利用者へ使いやすいサービスの提供に努めてきた。

今回の記念展示で紐解いた水田記念図書館の歴史について、展示だけで終わるのでなく記録として残す必要があると考え、BookMarkの特別号を作成した。次の50年に向けてさらなる進展をするために過去の記録をまとめておきたいと考えたのである。「図書館は進化する有機体」である。水田記念図書館がその名に恥じないよう、利用者から認められるような図書館として存在し続けたいと思う。また、創立当時の学生が図書を借りたい、もっと借りたいという純粋な欲求があったことを現在の学生にも知ってほしい。今なら45万5千冊余りの蔵書が、年間340日開館され、いつでも利用できるのである。

「変化し続ける図書館」を目指して

水田記念図書館 事務室 関口千登世

目標としてきたことは「変化し続ける図書館」である。学習支援を第一に各教科の専門書を集め、シラバスルームや学士力支援図書コーナーなどを設置し、電子ジャーナル、データベースなどを揃えてきた。それらの資料・情報を活字離れ、図書館離れといわれる学生たちにいかにして有効活用してもらうか、建学の理念に沿った図書館活動とは何かを考え、様々な取り組みをしてきた。学生アドバイザーの活動やビブリオバトル、ライブラリーラウンジは、学生たちを主体にすることで図書館を介して他者と積極的に関われるようにと企画した。学生アドバイザーは、相談者とのコミュニケーションの大切さや、ビブリオバトル、ライブラリーラウンジの企画・開催を経験し、組織で動くことを学んでいる。ビブリオバトルは「本を通して人を知る、人を通して本を知る」の言葉どおり、学部・学年を超えた学生達のコミュニケーションの場となっており、回を重ねるごとにプレゼン力の向上がみられる。ライブラリーラウンジでの地域アドバイザーによる講演は、人生の先輩からの貴重な経験談として学生への大きな刺激となっている。出版社の現役編集者や著作権の専門家による講演会、就職課との共催による就活DVD上映会などの企画は、図書館のキャリア支援活動を広げる機会ともなった。近隣の公共図書館との連携事業は、地域の方に大学図書館を知っていただく機会となっており、当館の資料を生涯学習にご活用いただいている。

大学図書館ができることは、まだまだある。社会の変化と学生のニーズを敏感に汲み取り、5年後、10年後も「変化し続ける図書館」を目指していきたい。

BookMark（城西大学水田記念図書館報）
Vol.89〔城西大学創立50周年記念特集号〕
2016年2月18日発行
©編集・発行：城西大学水田記念図書館
〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1
TEL ：049-271-7736 FAX ：049-286-8126
mail：library1@josai.ac.jp
URL:http://libopac.josai.ac.jp